

悲しみの先に見つけた 教えの光。

伊那教会 北原佑光子さん

「お金に負けました。誰も悪くないからね。いつも笑顔でいてください。大切な佑光子」。平成17年3月に自死した北原さんの夫が残した遺書の一文だ。結婚後に始めたエノキタケ栽培の経営不振に加え、義兄の借金を連帯保証人として10年以上返済し続けていたことから、心身ともに疲れ果てた夫。その心中を思いやれなかった自責の念と、義兄に対する恨みを抱えながらも、残された二人の子ども、義母との生活のために懸命に生きていた。10年が過ぎた頃、〈自分だけでなく、相手も一緒に幸せにならなければ真の救われではない〉という仏教の学びから、義兄家族へ連絡。自宅で再会した。ひ孫を抱いてうれしそうに談笑する義母。ふと、この光景を夫は喜んでいるかもしれないと思った。恨みや憎しみ、自責の念…自らにかけてきた呪縛から解放されたとき、「誰も悪くないからね」と書き残した夫の真意を受けとれたように感じた。



むだなものはない

仏はさまざまなかたちで、あるいはものごとをおして、私たちが迷いの世界から離れるヒントを与えてくれています。いいことも悪いことも含めたこの世のあらゆるできごとが、「ほんとうの自分」に帰って幸せを味わうためのヒント、縁になるといふことです。

人によつては、ケガや病気によつてほんとうの自分に気づくかもしれませんし、人の痛みが理解できるようになって初めて、慈悲の心が呼び覚まされる人があられるかもしれません。また、人の幸せを見てわがことのようにうれしくなったり、感動の涙がこぼれたりしたら、それは自分の仏性が現われているからでしょう。

仏は、すべての人が救われるように、幸せになるようにと願われていますが、私たちが人の悲しみや喜びを自分のこととして受けとめていくと、その仏の願いが自分の心に根づいていることに思い至るのです。

新型コロナウイルスの感染拡大など、世界に広がる現象も、私たち一人ひとりにいろいろなことを教えてくれます。私たちが、自分のこととして受けとめ、学べば、この世にむだなものごとは何一つなく、その一つ一つが「ほんとうの自分」、すなわち仏に帰る縁となるのです。

立正佼成会